

Title	自由帝国主義と新自由主義 : エドワード・リベラリズムの形成【二】
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 10 p.251-p.268
Issue Date	1994-03-18
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79631
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自由帝国主義と新自由主義

エドワーディアン・リベラリズムの形成【二】

岡 田 新

三 新自由主義のイデオロギー

(一)

ウィンストン・チャーチル(Winston Churchill)は、1945年3月に下院でロイド・ジョージ(Lloyd George)の追悼演説を行った。かつての盟友を悼むこの演説で、チャーチルは、1905年にロイド・ジョージが初めて入閣した頃を回想している。その頃自由党は、20年に及ぶ保守党優位の時代からようやく抜け出そうとしていた。しかしその実、チャーチルの述懐によれば、19世紀の自由主義のエネルギーは既に枯渇していた。自由主義には「新しい力を秘めた概念」が渴望されていたのである。⁽¹⁾

既に指摘したように、チャーチルが回想するとおり、19世紀末の自由党は深刻な危機の淵にあった。だがローズベリー(Lord Rosebery)を中心とする自由帝国主義派(Liberal Imperialists)には、党に新しい活力をもたらすエネルギーはなかった。またシドニー・ウェッブ(Sidney Webb)らフェビアン(Fabian)も、自由党を新たな方向に導くことはできなかった。⁽³⁾では、瀕死の状態にあった自由党を蘇らせたのは果して誰なのであろうか。華々しい社会改革を推進し、貴族院との激突を闘い抜いたあのエネルギーの源泉は、どこに求められるのであろうか。イギリス現代史の扉を叩くものは、まずこの謎に答えねばならない。

もっとも、20世紀初頭の自由党の復興を、19世紀の自由主義の復活に過ぎない、と考えるならば、こうした謎は起こるべくもない。事実ハマー(D.A.Hamer)⁽⁴⁾は、こうした見方に立っている。

ハマーによれば、1886年の分裂以後、自由党には、労働者や非国教徒などの圧力団体が台頭し、党は政治的な結集軸を失った。自由帝国主義派は、帝国主義を掲げて党を再結集しようと試みた。しかし自由帝国主義派には、体系的な政策もリーダーシップも欠けていた。これに対して、1905年以後の自由党政権は、アイルランド自治や、土地問題という古い自由主義のスローガンを再び前面に掲げた。これによって、自由党政権は陣営を再び結束させるのに成功したのである。

こう考えるハマーは、自由党政権が推進した社会改革には積極的な評価を与えていない。一連の社会改革は、階級闘争を避ける「防衛的」な改革に過ぎなかった。これを推進したのも、ウェールズの片田舎から現われたロイド・ジョージや、保守党から籍を移したチャーチルなど、党の「アウトサイダー」だった。こうハマーは言う。

確かに、自由党が大勝した1906年総選挙の最大の争点は、自由貿易政策であった。また1902年に保守党が制定した教育法(Balfour's Education Act)も、自由党の伝統的な支持基盤である非国教徒を憤激させ、自由党の旗の下に結束させた。従って20世紀初頭の自由党が、古い自由主義の政策と基盤を引き継いでいた、という見方には充分に根拠がある。

しかし自由貿易の推進と並んで、「自助」の強制と「小さな政府」の実現が、19世紀の自由主義の基本政策であった。一方、20世紀の自由党政権は、国民健康保険や老齢年金制度といった国家干渉的な社会政策を推進した。この点では、グラッドストーン時代の「安価な政府」と、20世紀の自由党政権との間には、やはり大きな転換があると言わねばならない。

こうした積極的な社会政策は、階級闘争に対する「防衛」に過ぎなかった、とするハマーの評価は、労働党や労働運動が、少なくとも潜在的には、秩序を脅かす存在であったことを前提にしている。しかし当時の労働運動は、いかなる意味でも革命的ではなかった。当時の自由党と労働党は、選挙協定すら結んでいた。そして例えこうした政策に「防衛的」な意図が含まれていたとしても、政策自体が「小さな政府」からの根本的な転換であったことは否み難い。またこうした社会政策を推進したのは、確かに非国教の平民、ロイド・ジョージのような、伝統的な支配層に属さない人物であった。しかしこれも、土地貴族が中枢を握っていた19世紀の自由党からの転換を表していると解釈することができる。

こうした点を考えると、20世紀初頭の自由党の復興を、19世紀の自由主義の単純な復活とみなすことは難しい。20世紀初頭の自由主義には、少なくとも19世紀の自由主義とは質的に異なる新たな要素が含まれていた。この新しい要素を特定し、古い要素との関係を探ること。これこそ歴史家が答えなければならない課題であろう。

(二)

イギリスでは、1970年代の後半から、20世紀初頭の自由党の復興を、自由主義の新しい発展段階として捉える研究が輩出した。この「自由主義のルネッサンス」に関する研究は、新しい自由主義のイデオロギーから、その選挙基盤の問題におよび、当時の政治地理についての分析も絡んで、今も鋭い論争が繰り広げられている。⁽⁴⁾しかしここではまず、イデオロギーのレベルで新自由主義を再評価するきっかけとなったフリーデン(Micheal Freedman)と、クラーク(Peter Clarke)の研究をとりあげて、第一次大戦前までの新自由主義の歴史的な性格についての基本的

な論点を確認しておくことにしたい。

新自由主義とよばれる思想潮流を担ったのは、一人の英雄ではなかった。『帝国主義』(Imperialism) (1902年)の著者として名高いJ.A.ホブソン(J.A.Hobson)。『マンチェスター・ガーディアン』(Manchester Guardian)の編集者から、ロンドン大学の社会学教授に就任したL.T.ホブハウス(L.T.Hobhouse)。『マンチェスター・ガーディアン』の編集者C.P.スコット(C.P.Scott)。自由党の下院議員チャールズ・トレヴェリアン(Charles Trevelyan)。『ナショナル・リフォーマー』(National Reformer)の編集者で自由党議員でもあったJ.M.ロバートソン(J.M.Robertson)。自由党下院議員マスターマン(Masterman)。『デイリー・クロニクル』(Daily Chronicle)、『ネーション』(Nation)の編集者H.W.マシingham(H.W.Mashingham)。こうした一群の政治家やジャーナリストが、この新しい潮流の担い手であった。

こうした人々は、ヴィクトリア朝の「繁栄」が色あせていった世紀末の大英帝国で、例えばレインボー・サークル(Rainbow Circle)と呼ばれるディスカッション・グループを創って、社会改革を論じていた。このサークルは、1893年にナショナル・リベラル・クラブ(National Liberal Club)のメンバーで結成され、1894年にはフリート街のパブ、レインボーで定期的な会合をもつようになった。会合の場所は、パブからブルームズベリ・スクエアの商人(Richard Stapley)の家に移されたが、サークルは、自由党の下院議員や候補者、労働党の下院議員など20数名を会員とし、数十年にわたって、毎月第一または第二水曜日の8時から10時頃まで定期的に会合を開き続けた。

1896年10月には、ウィリアム・クラーク(Willam Clarke)を編集主幹、ホブソンを副主幹として、機関誌『プログレッシブ・レビュー』(Progressive Review)も発刊された。雑誌はすぐに財政的に行き詰まってしまったが、サークル自体は活動を続け、第一次大戦後に次第に力を失って、1931年に解散されるまで、新しい自由主義の流れを汲む政治家、ジャーナリストの拠点であり続けた。フェビアン協会の指導的メンバーでありながら、ボーア戦争を巡ってウェブと対立し、たもとを分った政治学者グレாம்・ウォーラス(Graham Wallas)や、後に労働党首相となるラムゼイ・マクドナルド(Ramsey MacDonald)らもここに加わっていたのである。⁽⁵⁾

ではこうしたサークルに集まった人々の抱いた自由主義とは、どのような自由主義だったのであろうか。伝統的には、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)以降のイギリス自由主義は、グリーン(T.H.Green)に代表される「アイデアリズム」(Idealism)を媒介として、19世紀的な「個人主義」から脱却し、「コレクティビズム」(Collectivism)とよばれる国家干渉的な社会改革への道へと進んでいった、と解釈されてきた。しかし1978年に刊行されたフリーデンの研究『新自由主義—社会改革のイデオロギー』(The New Liberalism : An Ideology of Social Reform)は、それまで必ずしも十分に評価されてこなかった、ホブハウスやホブソンの思想に光を当て、自由主義思想史を塗り替えたエポック・メイキングな研究であった。⁽⁶⁾

フリーデンによれば、グリーンではなく、ホブハウスやホブソンこそ、生物学的なアナロジーを通じて、新しい自由主義理論を彫琢し、20世紀初頭の自由党政権で具体化される社会改革の構想を構築したのであった。新自由主義者も、グリーンが用いた「積極的自由」(positive liberty)の概念を好んで口にした。だがグリーン自身について見れば、グリーンは個人から離れた社会有機体の存在を認めなかった。グリーンが打ち出した「共通善」(common good)とは、各個人の自己完成の促進に他ならなかった。それは功利主義の掲げた目標と異なるものではなく、具体的な国家干渉的社会政策に繋がるものではなかった。だから、例えばグリーンがいなくとも、自由主義の根本的な転換は起こりえた。フリーデンはこう主張する。(7)

ホブソンやホブハウスらも、社会改革を新しい倫理の実現として捉えていた。しかしフリーデンによれば、この倫理に新たな理論的支柱を与えたのが生物学だった。ホブハウスの理論は、スペンサー(Spencer)と同じく、進化論を基礎にしていた。しかし新自由主義の進化論は、スペンサー的な個人の自然淘汰による進化の論理ではなかった。またそれは「社会帝国主義」に特徴的な、人種間の闘争による進化論でもなかった。新自由主義の社会進化論は、個人や人種の間の闘争ではなく、人間相互の博愛主義的協力による進化という、新しい概念の進化論であった。フリーデンはホブハウスの思想からこれを浮き彫りにしている。

そもそもホブハウスにとって、人間の進歩とは、単なる物質的な発展ではなかった。人間の進歩は、本質的に道徳的なものであると考えられた。スペンサーは、人間が進化の自然法則に干渉するのを非難した。だがホブハウスのように、進化を道徳的な過程と見るとすれば、人間の意識的ないし道徳的な行為は、進化の法則に反する干渉ではなくなる。それどころか人間の意識的行為は、逆に人間の進化の本質的な構成部分であり、進化の積極的な所産であるとともに、進化を押し進める推進力と考えられた。

こうしてホブハウスは、人間の進化の本質的な構成要素を、個人の中の「淘汰」ではなく、人間の道徳的な「相互扶助」(Mutual Aids)の発展に見た。国家干渉的な社会改革は、この「相互扶助」の発露に他ならない。「社会帝国主義」も、社会有機体の進化の手段として、国家干渉的な社会政策の必要を説いた。しかしホブハウスにおいては、国家干渉は、人種間の競争に勝ち抜く手段ではなかった。ホブハウスでは、社会改革は手段ではなく、それ自体が道徳的な社会発展の目的だった。倫理が進化過程の外に置かれるのではなく、進化の内的な要因として捉えられているところに、フリーデンは、新自由主義の進化論の特質を見いだしている。(8)

ホブハウスにとっては、この道徳的発展は、自己を社会の一部として意識する個人の認識の深まりを意味していた。ホブハウスの社会とは、こうした意識によって個人の間にもたらされる調和以外の何者でもなかった。これに対してホブソンは、もっと明確に、個人から独立した存在としての社会有機体を認める。しかしホブソンの場合にも、この社会有機体は、個人を消滅させてしまう超越的な存在ではなかった。ホブソンの社会は、個々人の「連合」(federal unity)に過ぎなかった。「社会帝国主義」の場合、個人は社会有機体の一器官であった。これに対して、ホ

ブソンにおいては、社会は個人の連合であり、それゆえ社会の発展も、何らかの個人を超越する存在の発展ではなく、何よりもまず、連合体を構成する各個人の発展を意味する。この個々人の発展が束ね合わされたものこそ、社会の発展に他ならない。従ってホブソンにおいては、個人を更に自由に創造的に発展させること。これが社会発展の本質的基礎として展望された。こうフリーデンは捉える。⁽⁹⁾

フリーデンによれば、こうした「連合体」的な有機体観に立つことによって、ホブソンは個人の自由と、それに基づく自由競争、自由市場に積極的な価値を与えることができた。ホブソンの個人は、創意を発揮して自ら能動的かつ主体的にふるまう。自由市場は、この個人の主体性を函養するものとしてとらえられ、自由競争を破棄するのではなく、むしろそれを公正に保障するためにこそ、国家干渉の発動が必要とされたのであった。

しかしこの国家干渉は、19世紀の自由主義からホブソンを旋回させるに足るものであった。ホブソンにとって、個人は能動的存在ではあったが、決して自己完結ではなかった。個人は、経済的、社会的に、社会有機体に多くを依存している。個人の財産といえども、神聖不可侵ではありえなかった。フリーデンの表現を用いれば、これこそホブソンの「自由主義の中の社会主義」の視点であった。ただし、ここでいう社会主義とは、アトム的な個人に対する、広い意味での社会的存在としての人間の認識を意味し、社会的存在として求められる倫理的な要請のことであった。従ってホブソンの国家は、社会を所有するのではなく、社会の力をコントロールするに過ぎない。⁽¹⁰⁾

具体的には、この視点は財政政策による「不労価値増加」(unearned increments)の吸収、その再配分による「ナショナル・ミニマム」の保障へと展開された。ジョン・スチュアート・ミルは、既に地代の「不労価値増加」を、社会全体によって創出されたものとして捉えていた。ホブソンは、このミルの議論を更に拡張し、社会が何らかの形で創出に寄与した「不労価値増加」は、社会有機体に帰属すべきものである、と主張した。フリーデンに従えば、これは独占と特権に対する自由主義の闘争を継承する理念であり、労働に基づく所有という、本来の私的所有の理念を保障するもの、と考えられたのである。⁽¹¹⁾

他方、自由競争が健全に機能するためには、万人がその能力を発揮するに必要な最低限の資源が、平等に配分されねばならない。こうしてホブソンの国家は、グラッドストーン的な夜警国家とは根本的に相貌を異にすることになった。国家は、「個人が自分の努力で自分自身の快適な生活や富をその上に築くことができる」基礎を万人に提供する義務を負う。この「ミニマム・スタンダード」は、最低限の衣食住ばかりでなく、教育や、芸術活動の基盤を含んでいた。何故なら、このことによって初めて、競争はコストを下げる競争ではなく、「仕事の素晴らしさを競う」ものになるからである。この芸術と産業の一致というホブソンの理想は、フリーデンによれば、産業文明の批判者ラスキン(Ruskin)を継承するものであった。ホブソンにとっては、生産効率ではなく、消費の豊かさこそ、経済の目的であった。これが転倒し、効率だけが追求されたところ

ろに、ヴィクトリア時代の問題の根源があった。「ミニマム・スタンダード」の実現こそ、この転倒を正す方策だったのである。⁽¹²⁾

『帝国主義論』が提起した過小消費説も、フリーデンに従えば、単に帝国主義批判の理論であるばかりではない。この理論は、自由主義をヴィクトリア時代の「自助」の呪縛から解き放ち、積極的な社会改革を社会全体の変革に連携した理論であった。過小消費税によって、「不労所得」の再配分は、初めて単なる慈善行為ではなく、社会の貧困と対外的帝国主義の相互補完的構造を打ち破る鋭い武器となったのである。⁽¹³⁾

(三)

フリーデンの研究と同じく、1978年に出版されたピーター・クラークの『自由主義者と社会民主主義者』(*Liberals and Social Democrats*)は⁽¹⁴⁾、フリーデンとは違った歴史的なアプローチによって、20世紀初頭の社会改革に対する新自由主義者の貢献を鮮やかに浮び上がらせた作品であった。

フリーデンは、ホブハウス、ホブソンの理論的な構造に関心を集中し、他の知識人については、注でわずかに触れているに過ぎない。これに対してクラークは、思想史家スキナー(Skinner)が提唱したコンテクスチュアライゼーション(contextualization)の方法を採用する。⁽¹⁵⁾ レッサーなテキストを掘り起こして、同時代の知識人が織り成す時代のコンテクストを浮び上がらせ、その中で思想を評価する。こうした観点から、クラークは、ホブソン、ホブハウスだけでなく、ウォーラスや、ハモンド(J.L.Hammond)、更には世紀転換期に生きた多くの社会主義者や自由主義者の知識人を視野に入れて、その政治論を跡づけ、錯綜した相互の交渉と葛藤を描き出したのであった。

クラークも、グラッドストーンの時代の自由主義と、20世紀初頭の自由主義との間には、根本的な転換があったことを指摘する。クラークによれば、グラッドストーンの自由主義の本質は、イギリス帝国の進むべき道を大衆に問いかけ、その道徳的な判断を求めるモラル・ポピュリズムであった。グラッドストーンは、階級的な問題や物質的な生活の充足の問題を意識的に政治から遠ざけた。信仰篤いグラッドストーンは、社会問題を人間の原罪に帰し、国家の力による現世的な救済には積極的な意義を認めなかった。グラッドストーンは、社会改革については、終始悲観的な静観(quietism)の態度を崩さなかったのである。⁽¹⁶⁾

グリーンのアイデアリズムが、こうしたグラッドストーン的な自由主義をどれほど転換したか。フリーデンと同じくクラークも、この点には強い疑問符を付す。グリーンは現世における理性の働きと、それに基づく進歩を信奉した。だがヘーゲル(Hegel)のように、国家自体が人間に真の自由を与えるという立場に立つことは、ついになかった。具体的なレベルでも、グリーンは、土地法改革と飲酒の規制を越える積極的な国家干渉を唱道することはなかった。⁽¹⁷⁾

事実新自由主義者ホブハウス、ホブソン、ウォーラスらはグリーンの影響の下に育ったわけではない、とクラークは指摘する。オックスフォードでも、彼らはグリーンの影響の強いベイリオルの出身ではなかった。(18)これに対してクラークは、ウォーラスを例にとって、フェビアン社会主義が新自由主義の形成に果たした役割を評価する。ウォーラスは、ウェップ、ショウらとともに『資本論』を読み、剰余価値説に反対するようになった。そしてウォーラスはリカードの差額地代論を拡大したウェップの地代理論に共鳴し、1886年にフェビアン協会に加入した。ウォーラスばかりでなくホブハウスの「地代」理論も、フェビアンに起源をもつ、「薄められたフェビアニズム」であった、とクラークは言う。(19)

フェビアンが20世紀初頭の現実政治に大きな役割を果たしたと見る見方。周知のようにこれは、既にマクブライアー(A.M.McBriar)の研究によって否定されている。(20)クラークも、このフェビアン神話を復活しようとするわけではない。しかし1890年代について言えば、フェビアンは、思想的には社会進歩の牽引車の役割を演じていた。こうクラークは捉えている。(21)

しかしクラークの見るところ、ボーア戦争の勃発とともに、フェビアンとその盟友自由帝国主義派と、新自由主義の間の協力関係は根底から解体した。ホブハウス、ホブソンらは、自由帝国主義派やフェビアンとは対照的に、ボーア戦争に厳しく反対し、反帝国主義の論陣を張った。クラークは、ホブソン、ホブハウスが、反ボーア戦争の旗頭となり、関税改革や「人民予算」をめぐる貴族院との対決でも、自由主義陣営をリードしてゆく様相を描き出している。(22)

ホブハウスにとって、帝国主義は「競争的な産業の利害」の産物であり、社会には何の利益ももたらさない愚行であった。ボーア戦争への賛否は、政治的な試金石と考えられ、マンチェスター・ガーディアン紙の紙面は、激しい反戦の論調で埋められた。戦争を支持したフェビアンは、「大資本家を敵ではなく、味方と考える社会主義」と蔑まれ、反動陣営に転落したことを指弾された。逆にホブハウスはグラッドストンの伝統を守って戦争に反対したオールド・リベラリストのモーリー(John Morley)を、反戦の演説会に招いた。ガーディアン紙は、南アフリカの強制収容所でのホブハウスの姉の見聞を公表し、自由党党首キャンベル・バナマンを政府批判にふみきらせるきっかけをつくった。ガーディアンから南アフリカに派遣されたホブソンも、その取材に基づいて、戦争を「プレトリアの鉱山所有者と投機家の寡頭制支配の権力を守る」陰謀として非難する報告を出版し、一躍「プロ・ボーア」の理論的指導者となった。帝国主義を狭隘な国内市場の過小消費によって生じる現象として論じる『帝国主義』は、このプロ・ボーアの立場を、理論的に正当化する著作だったのである。(23)

ボーア戦争の後、チェンバレンが提唱した関税改革は、自由帝国主義派を混乱させ、統一党を分裂させた。この問題についても、ホブハウスとホブソンは、伝統的な自由主義のスローガンである自由貿易の旗手として運動の先頭に躍り出た。ホブハウスは、1903年に自由貿易を守るための自由党の組織、自由貿易同盟(Free Trade Union)の書記となり、ホブソンは、カナダを訪問してフィールディング関税の実態を調べ、これを手厳しく批判したのである。(24)

クラークによれば、内政についてもホブハウス・ホブソンらは、自由帝国主義やフェビ안의国家主義的なエリート主義的な改革を鋭く批判した。ホブハウスにとって、社会改革は、あくまで古い自由主義の原理の発展でなければならなかった。社会主義の名前で自由主義の原則を捨て去ることは、「進歩を求めて反動に転ずること」であり、ホブハウスは、国家権力の拡大をすべて社会主義の勝利として考えるフェビアンを厳しく非難した。ホブソンも、フェビアンを「陰謀を企む」ものときめつけた。ウエップが称揚する専門家の支配は、新自由主義者にとっては、本質的に反自由主義的であり、機械的な効率に対して自由を守ることこそ、リベラリズムの使命である、と思われたのである。⁽²⁵⁾

ではホブソンやホブハウスが提言した社会改革は、いかなるものであったか。クラークによれば、それはフェビアン流の「国家的効率」の促進ではなく、特権と独占を攻撃する財政政策であり、具体的には土地課税であった。「貴族院との闘争の真の戦場」は土地である、とホブハウスは喝破し、ホブソンは「安価な政府」の概念を覆して、財政を富の再配分的手段として捉える視点を打ち出した。ロイド・ジョージの「人民予算」が提出されると、ホブソンとホブハウスはこれを「革命的予算」と呼んで歓迎し、貴族院との対決を「貴族と土地」の問題に歴史的な最終決着をつける機会と捉えた。ウエップらフェビアンが「人民予算」の闘争に背をむけ続けていたのとは全く対照的に、ホブソン、ホブハウスらは、未曾有の憲政危機の最前線で闘ったのである。⁽²⁶⁾

(四)

こうしてフリーデンとクラークの研究は、ホブハウス、ホブソンらこそ、新自由主義と呼ぶに相応しい新しい社会進歩の理論を構築したことを明らかにした。二人の研究は、グリーンズのアイデアリズムが自由主義の転換をもたらしたとする通説を覆し、同時に自由党政権下の社会政策の展開を、帝国主義的競争や社会主義の「浸透」ではなく、自由主義思想の内的な発展の結実として捉え直す新しい見方を打ち立てたのである。

既に触れたように、アメリカの歴史家センメル(Semmel)は、20世紀初頭のイギリスの自由主義の社会改革のエネルギーを帝国主義と結びつけ、「社会帝国主義」という概念で当時の思潮を整理した。センメルによれば、「集団外的社会進化論」(external Social Darwinism)こそ、「社会帝国主義」の理論的な支柱であった。

ハーバート・スペンサーは、ダーウィンの適者生存の論理を人間社会に適用し、個人の自由競争による淘汰を、人間社会の進歩の基本法則として捉えた。センメルは、こうしたスペンサーの社会進化論を「集団内的社会進化論」(internal Social Darwinism)と呼ぶ。他方こうしたスペンサー流の進化論に反対して、適者生存の単位を個人ではなく人種や国家に置き、人種と人種、国家と国家の競争と淘汰の中に進化の原動力を認める理論。これをセンメルは「集団外的社会進化論」と名づけた。センメルは、ピアソン(Pearson)やキッド(Kidd)らが発展させたこの「集団外的

進化論」に、自由放任から「社会帝国主義」への思想的な転換の基軸を認めたのである。⁽²⁷⁾

自由帝国主義派やフェビアンが、20世紀初頭の社会改革に決定的な影響を及ぼしたというセンメル主張は、史実とは符合しない。しかし当時の思潮を、「集団内的社会進化論」と「集団外的社会進化論」に大別して整理すること自体にも、根本的な問題点が含まれていた。フリーデンは、社会ダーウィニズムは、決してイギリスの社会思想の中核になったことはなく、その影響は、一部の「反動的反人道的」陣営に限られていた、と強調する。実際フリーデンの研究は、新自由主義がセンメルの類型化した進化論とは全く違ったタイプの自由主義的な進化論を、確立したことを解き明かしたものであった。フリーデンは、センメルが、新しい自由主義的進化論の登場を見落としていたことを厳しく批判している。⁽²⁸⁾一方クラークも、ボーア戦争賛成になびいた自由帝国主義派やフェビアンではなく、逆に敢然と反帝国主義の側に立ったホブハウスやホブソンらこそ、自由党政権の社会改革や貴族院との闘争を支えたイデオログであったことを鮮明にしたのであった。

もとより実際の政治過程は、イデオロギーの影響力だけから説明できるわけではない。権力の回廊では、階級的な利害や帝國的打算が衝突し、政治家の野心が渦を巻いていた。思弁的な理論を嫌うイギリスの政治家や、一般の選挙民が、こうした自由主義理論の転換によって実際にどれほどの影響を受けたか。それは別個の研究の課題である。しかし新自由主義が、19世紀の自由主義の思想をどのように継承し、労働者階級の政治組織や社会主義思想にどのようなスタンスをとったのか。こうした政治思想の問題に限っても、フリーデンとクラークの間には、実は鋭い違いが認められる。

フリーデンは、J.S.ミル以後、ベヴァリッジ(Beveridge)に至る20世紀の自由主義思想の理論的な発展を追跡し、新自由主義をその一階梯として捉えている。フリーデンは、ロック(Lock)以来の自由主義の思想を共通に構成する要素として、人間の理性と能力への信頼、社会の普遍的な利益の実現、それを保障する自由および法の支配、立憲的政治体制への信頼をあげる。⁽²⁹⁾フリーデンによれば、新自由主義は、こうした自由主義の本質的な構成要素を堅持した。新自由主義は、自由主義の伝統を放棄しようとしたのではなく、自由主義を時代にふさわしいものに進化させようとしたのである。新自由主義が、改革を指向する幅広い革新的な思想運動の一部であったこと。フリーデンもこれを認める。しかし革新的運動の中には、自由主義的な精神とは全く異なる立場も含まれていた。だからこそ、新自由主義者は自由主義の立場から、時代の課題に取り組む必要があったのだ、とフリーデンは言う。フリーデンにとっては、新自由主義はあくまでも新しい「自由主義」であり、「社会的自由主義」であった。⁽³⁰⁾

フリーデンによれば、自然権の理論や、私的所有の崇拜や、無制限な競争といった概念は、自由主義にとって本質的なものではなく、付随的なものに過ぎない。19世紀の自由主義の基礎になっていたいわゆる「個人主義」の中には、「個人の自己表出と発展」という要素と、レッセ・フェー

ルという特定の社会経済的ドクトリンの二つの要素があり、両者は決して不可分のものではなかった。功利主義が追求したものも、無制限な自由などではなく、最大多数の最大「幸福」であり、自由はそうした「幸福」の前提であり、一部であると考えられていたに過ぎない。19世紀の自由主義思想は、「幸福」をもたらすキー・コンセプトとして、自由と共に「福祉」を次第に思想の中に組み込んでいった。だから、ホブハウス、ホブソンらにとっては、レッセ・フェールは、もはや自由主義の不可欠の構成部分ではなくなっていた。19世紀末にはレッセ・フェールを唱えていたのはむしろ保守党の側であり、レッセ・フェールの放棄は、自由主義にとっては、本質的でない外皮を捨て去るに過ぎなかったのである。⁽³¹⁾

他方フリーデンのみるところ、フェビアン社会主義と新自由主義とは、1890年代には、確かに共通の政策を推進するプラティカルな同盟関係を結んでいた。また当面求められるべき国家干渉については、ウェッブとホブソンの間には大きな違いは認め難い。⁽³²⁾にもかかわらず、理論的には両者は本質的な違いをもっていた。ウェッブは、ハクスレー(Huxley)にならって、社会有機体の倫理を、個人の進化発展とは根本的に対立したものとして捉え、その上で社会有機体の発展が優先さるべきことを説いた。これは、倫理を進化の内部の要因として捉え、個人の進化の上に社会の進化を捉える新自由主義とは異質な見解であった、とフリーデンは見る。⁽³³⁾

社会改革の展望においても、フェビアンと新自由主義は、根本的にすれ違う運命にあった、とフリーデンは言う。フェビアンは、革命ではなく、漸進的な改革によって社会主義を実現しようとした。にもかかわらず、フェビアンは、やはり市場経済の止揚を社会変革の究極目標と考えていた。これに対してホブソンら新自由主義は、私企業と市場経済自体を決して悪とは考えない。ホブソンにとって、競争や市場のメカニズムは基本的に健全であった。その健全さを維持するために、その限りで、国家の干渉が必要とされたのである。ホブソンらの唱えたのは、いわば社会主義と個人主義の分業であった、とフリーデンは言う。⁽³⁴⁾

こうしてホブソン、ホブハウスらは、社会主義や保守主義とは決定的に異なる自由主義的な社会概念を保持し続けた。新自由主義は、社会主義から概念を借用したわけではない。従って社会主義の「浸透」が、自由主義の転換の原因であるとする主張には、全く根拠がない。むしろ社会主義の方こそ、自由主義の展開から影響を受けた。エドワード朝の社会改革は、こうした自由主義の内的な発展に沿った改革であったのである。⁽³⁵⁾こうしてフリーデンは、自由主義の伝統の発展的継承として新自由主義を捉える。それは狭い意味での社会主義とは、一線を画す存在であった。⁽³⁶⁾

クラークも、もちろんフェビアンと新自由主義の違いを認めないわけではない。クラークによれば、フェビアンは、社会機構の「機械的な改革」に執心し、非民主的な専門家支配の崇拜に陥った。これに対し、新自由主義は「道徳的な改革」をめざし続けた。ボーア戦争以後、帝国主義、自由貿易、内政改革をめぐる繰り広げられた両者の政治的な対立。これこそクラークの著作の

主要なモチーフであった。しかしにもかかわらず、クラークは、フェビアンの一員であったウオラスを、新自由主義の中心人物の一人に数え、新自由主義の形成にフェビアンが果たした役割を高く評価する。フリーデンとは対照的に、クラークは、フェビアンと新自由主義が、さまざまな違いにもかかわらず、「多くを共有していた」ことを指摘し、両者を「革新主義」(prograssivism)の二つの潮流として位置づけるのである。⁽³⁷⁾

クラークは、『自由主義者と社会民主主義者』に先立って、19世紀末から20世紀初頭のランカシャーの自由党組織と選挙を詳細に分析した『ランカシャーと新自由主義(Lancashire and the New Liberalism)』を世に問うていた。⁽³⁸⁾この研究でクラークは、19世紀末から20世紀初頭に、投票行動の基盤が宗教から階級的な利益へと変わり、労働者階級と自由党の「革新ブロック」が形成され、この労働者階級の階級的な支持こそ、20世紀初頭の自由党の再生の基盤である、とする画期的な見解を打ち出していた。『自由主義者と社会民主主義者』は、『ランカシャーと新自由主義』で打ち出したこの解釈を、インテレクチュアル・ヒストリーの側面から補強しようとした研究でもあった。

クラークは「革新主義」の概念を、この時期の進歩的な社会改革の潮流を指す概念として初めてイギリス現代史に本格的に導入した歴史家であった。クラークによれば、この概念は、積極的な国家干渉による社会正義の実現を表象し、実践的には、自由党と労働党の協働関係を意味する。第一次大戦後、この概念はすっかり忘れ去られてしまった。しかしクラークの見るところ、第一次大戦までは、この「革新主義」こそ、幅広い社会改革運動を表すスローガンであった。この時期には、社会主義と自由主義の間には「深い溝」は存在しなかった、とクラークは言う。

クラークも、新自由主義が自由主義の継承者という強い自覚を持っていたことを否定しない。しかしキリスト教徒の大衆個々人の理性を信頼したグラッドストーンとは違って、新自由主義は、もはや個人の理性ではなく、大衆全体の「集合的な知恵」を信じるようになっていた、とクラークは強調する。⁽³⁹⁾

「社会民主主義」の起源を扱った論文では、クラークは、新自由主義とフェビアンを含む「革新主義」を明確に「社会民主主義」の先駆的な形態として位置づけている。クラークの定義によれば、「社会民主主義」とは、議会制民主主義と混合経済の枠内で、社会正義を実現する思想である。この思想は、労働組合のセルフ・インタレストと拮抗しつつ、今日まで労働党を動かしてきた。クラークは、ホブハウス自身が、この意味での「社会民主主義」ということばを肯定的に用いていた例を指摘する。19世紀の古い自由主義が達成したものが政治的民主主義であったとすれば、20世紀の新しい自由主義が創るべきものは、まさにこの「社会民主主義」だった。マルクス主義の階級闘争の概念を拒絶し、コミュニティ全体の利益に訴える。クラークの眼からすれば、この一点で、フェビアンと新自由主義、トーニー(R.H.Tawney)と戦後の労働党のゲイツキル主義(Gaitskellites)は、同列に並べうるのである。⁽⁴⁰⁾

別の論稿ではクラークは、新自由主義を、マルクス主義の言う労働組合主義的な階級意識の担

い手であったとすら示唆している。⁽⁴¹⁾こうしてクラークによれば、19世紀末から20世紀初頭に、自由主義の基盤は、宗教（非国教徒）から階級的利害（労働者階級）へと転換し、その内容も、政治的民主主義から「社会民主主義」へと変貌した。この転換は、グラッドストーンの個人主義的自由主義からの脱却という意味において、大局的には、フェビアンや労働党の目指すものと同じ方向にあった、というのである。

こうしてクラークとフリーデンの新自由主義の理解には、重大な相違がある。20世紀初頭の社会改革のドライヴィング・フォースとして新自由主義を位置付ける点では、両者は基本的に一致している。しかし新自由主義における理性の意味や個人と社会の関係、その社会主義との異同といったクルーシャルな論点で、両者の間には深い亀裂が走っている。ここには、自由主義の本質をどう理解し、それを歴史の流れの中でどう位置づけるか、という根本的な歴史観の違いが伏在しているように思われる。⁽⁴²⁾

自由党の選挙基盤をめぐる論争では、新自由主義に対するこうした見方の対立は、更に明瞭に表されている。他の所でも述べたように、クラークの前著『ランカシャーと新自由主義』に対して、マシュー(H.C.G. Matthew)、マクキビン(McKibbin)らは厳しい批判を加えた。マシューらは、労働党と自由党を根本的に異質な基盤を持つ政党と捉え、「革新ブロック」の存在に疑問を投げかけるとともに、宗教から階級に投票行動の基盤が転換した、とするクラークの仮説に実証的な批判を加えた。⁽⁴³⁾ここではこの論争の内容に立ち入る余裕はない。だがマクキビンが改めて指摘しているように、⁽⁴⁴⁾この論争でも、選挙基盤の実態とならんで、自由主義をどうとらえるかという「政治文化」の問題がもう一つの焦点となっていた。クラークへの批判の中で、マシュー、マクキビンらは、自由主義は、新自由主義を含めて、あくまでも理性的合理的な市民像を前提にしていると主張し、労働者階級は、これとは馴染まない独自の文化をもつ階級的コミュニティを形成していたと捉えている。これに対して、クラークはマシューらへの反論の中で、労働者階級の労働党への結束を過大評価することに疑問を呈し、ウォーラスの『政治における人間性』(*Human Nature in Politics*)を例証にあげて、新自由主義こそ、19世紀的な市民像を克服しているとする思想だったと反駁したのであった。⁽⁴⁵⁾

新自由主義を、本質的に19世紀的自由主義の継承者として捉え、労働者階級や社会主義との距離を強調するマシュー、マクキビン。彼らは、20世紀の自由主義を、フリーデンよりも更に19世紀の自由主義にひきつけて理解していると言えよう。これとクラークの見解との間にはかなりの隔たりがある。両者の距離は、19世紀のイギリスと20世紀のイギリスをどのように架橋するか、自由主義の時代とその終焉のプロセスをどうとらえるか、という大きな問いに繋がっているのである。

（五）

ヒストリオグラフィカルな整理を目的とする本稿では、こうした論点に具体的に踏み込むことはできない。また、一人一人個性にあふれる新自由主義者を、一般化して論じること自体、大きな危険がある。新自由主義者がいかに自由主義の伝統を継承し、それを刷新したか。この問題は、個々の思想家とその作品に即して深められなければならない。ここでは、そうした研究を進めるための視座を整えるために、簡単な考察を加えるに留めたい。

もともと「個人主義」から「コレクティビズム」へというシェーマは、ダイシー(Dicey)の『法律と世論』(*Law and Public Opinion*, 1905)以来、この時期の歴史の潮流を捉える有力な枠組みとなってきた。同時代の人々も、しばしばこのタームで自己の位置を規定していた。しかし、イギリス社会の歴史的形成についての優れた著作で知られる社会学者のハロルド・パーキン(Harold Perkin)は、このシェーマに根本的な批判を加えている。パーキンによれば、国家干渉の程度という極めて現実的な観点から見ると、「個人主義」の中には少なくとも二つの、「コレクティビズム」の中には、七つの段階が区別できる。そしてイギリスについて言えば、理論的にも、歴史的にも、「個人主義」と「コレクティビズム」の間には、激しい政治闘争をかきたてる飛躍は全く存在しなかった。真の対立は、むしろ「コレクティビズム」の中の、国家による部分的な公共的サービスの提供の段階と、全産業の国有化との間にあった。⁽⁴⁶⁾

フリーデンも、政治哲学的に見て「個人主義」にはさまざまな要素が含まれていることを指摘し、ダイシー的シェーマでこの時期を把握する危険性を指摘していた。パーキンの指摘は、具体的な歴史分析においても、国家干渉の程度、つまり「小さな政府」から「大きな政府」への転換だけを尺度に、歴史を整序することが難しいことを示している。

事実、積極的な国家干渉的社会政策は、19世紀末からさまざまな政治的立場によって推進されてきた。19世紀中葉のいわゆる行政革命が、次第に国家干渉の領域を押し拡げていったことを別としても、19世紀末には、人道主義的な社会活動家、自由帝国主義、フェビアン、新自由主義者、革命的社会主義者、そしてディズレイリのトーリーは、それぞれの角度から、さまざまな程度で、積極的な国家干渉による社会政策を要求した。国歌干渉に否定的なグラッドストーンの遺髪を継いだウィリアム・ハーコート(William Harcourt)ですら、「我々は皆社会主義者である」と宣言した。このことは、時代を象徴していた。「個人主義」と「コレクティビズム」の間には、架橋不能な壁が屹立していたわけではない。その間には、なだらかな丘陵が広がっていたに過ぎなかった。

20世紀初頭でも、老齢年金や国民保険制度といった国家干渉的な社会改革の方策自体をめぐって、政治党派が激しく衝突したわけではなかった。ソールズベリー(Salisbury)が率いる統一党は、全体としては国家干渉に消極的であった。だがその抵抗は組織性を欠いたものであった。⁽⁴⁷⁾アイルランド自治問題で自由党を割った自由統一党が合流して以後、保守党は、反アイルラ

ンド自治を唯一最大の結集軸とする反動的な統一戦線である統一党へと姿を変えた。20世紀初頭の政治闘争は、ハインサイトを持って冷静に見ると、国家干渉の程度をめぐるのではなく、自由主義的な急進派が一貫して争ってきた伝統的な政治課題—帝国主義戦争の是非、自由貿易と関税問題、宗教教育、貴族院の拒否権や土地課税をめぐる燃え上がったのであった。

しかし20世紀と19世紀の政治的なシーンの大きな違いは、こうした伝統的な政治課題が、国家干渉的な社会改革と絡み合って提起されたところにある。チェンバレンの関税改革キャンペーンは、社会改革の財源を関税改革に求めた。これに対してロイド・ジョージの「人民予算」は、社会改革の財源を土地課税に求めた。国家干渉の拡大それ自体については、政治的対立は希薄であるかに思えた。このことこそ、フェビアンが自由党と統一党双方へ「浸透」しようとした基礎であった。しかし現実には、伝統的な急進改革のテーマと国家干渉は不可分に重なって歴史の舞台に登場した。これこそ、フェビアンの「浸透」が結局惨めな失敗に終わった決定的要因だったのである。⁽⁴⁸⁾

従って20世紀初頭のイギリスでは、国家干渉の推進か、「小さな政府」か、が争われたのではない。どのような形でこの国家干渉を実現するのか。自由貿易の体制内で、土地貴族の特権をそぐ自由主義的急進的な改革を徹底する方向で、国家干渉を進めるのか。それとも自由貿易体制を修正し、帝国体制を「上から」強化する方向で国家干渉を進めるのか。あるいはあくまで現状維持に終始するのか。これが問われていたのである。「大きな政府」の必要に同意した人々も、どのような形でそれを実現するかについては、決して一致しなかった。フリーデンが指摘するように、自由主義の遺産を継承するのか、それともそれを清算するのか、という全く対立する志向が改革運動の中には存在していたと考えるべきであろう。

もちろんクラークの言う「革新主義」は、ダイシーの二分法と同じではない。それは自由党と労働党、労働者階級の協力関係という歴史的事態を背景にもっている。クラークの「革新主義」の概念は、自由党の一方的な衰退と労働者階級の労働党への結集という従来の素朴な枠組みをつき崩した。自由主義を基盤にした労働者との同盟、労働者を支持基盤に取り組み自由主義の再編成を表わす概念としては、「革新主義」の概念は依然として光彩を放っている。しかしクラーク自身が記述しているように、「1899年にどこにいたか」、つまりボーア戦争時にとった態度こそ、この時期の政治家や知識人にとって、自由主義的伝統を継承するかどうかの、生涯にわたる政治的なリトマス試験紙であり続けた。⁽⁴⁸⁾労働党の指導者と新自由主義者は、この自由主義のテストに合格した。しかしフェビアンは、まさにこの時、大国の併合を礼賛するパンフレットを出版していた。⁽⁵⁰⁾とすれば、そもそも労働運動との関係のとばしいフェビアンを、この「革新主義」の陣営に加えるのには、重大な留保が必要であろう。

新自由主義者にとっては、積極的な国家は、フェビアンのように自由主義の克服でなく、戦闘的な自由主義の伝統的な闘争目標＝自由貿易の堅持、市民的自由の擁護や不干渉の伝統、土地貴族の特権に対する闘いのクライマックスであった。ジェントルマンの「古き楽しきイギリス」の

伝統。これと共に、ピューリタンの伝統が、抜き難い基盤を持つイギリス。ここでは20世紀の積極的な国家も、この二つの伝統の間の闘争と無縁に生まれ出ることはできなかった。ウェールズ出身の非国教徒ロイド・ジョージこそ、ボーア戦争に反対し、バルフォア教育法へのウェールズの抵抗を組織し、土地貴族への攻撃と、福祉の拡大を巧みに結合して「人民予算」の闘争をリードしたのであった。もっとも皮肉にもこの「人民のチャンピオン」ロイド・ジョージこそ、やがて少数民族の防衛、戦争をなくすための戦争を掲げて、軍需経済を統率し、総力戦を指揮して国民の命を徴兵に駆り立てる大統領的宰相となり、ついには自由党を永遠に引き裂いたのであった。

フリーデンとクラークの研究によって、新自由主義は、イギリス現代史の扉の上に深く刻まれた。しかし新自由主義の19世紀の自由主義、そして社会主義との関係をめぐっては、なお重要な問題点が残されている。フリーデン、クラークの研究に続いて現れた研究が、こうした問題にどう取り組んだか。我々は次にこれに耳を傾けるべきであろう。(未完)

注 記

- (1) Winston Churchill, *The Speeches of Winston Churchill* (London, 1990) p.247.
- (2) 拙稿「自由帝国主義と新自由主義—エドワーディアン・リベラリズムの形成【一】」『大阪外国語大学論集』、第5号、1991年参照。
- (3) D.A.Hamer, *Liberal Politics in the Age of Gladstone and Rosebery: A Study in Leadership and Policy* (Oxford, 1972).
- (4) 新自由主義の選挙基盤をめぐる論争については、別に詳細に論じる必要がある。さしあたり論争の発端については、拙稿「自由党再生の選挙基盤—新自由主義論争とエドワーディアン・リベラリズムの構造：要綱」、(松田武編『世界システムの変容と国民統合』、文部省科学研究費一般研究研究報告書、1992年所収)。またこの論争に対する筆者なりの分析の試みとしては、拙稿「自由党再生の構造」(松田武、阿河雄二郎編『近代世界システムの歴史的構図』、溪水社、1993年所収)および「自由党再生の地帯構造」(内田編、『英語圏世界の総合的研究』、大阪外国語大学、1993年所収)を参照。論争の基本的な文献としては、Peter Clarke, *Lancashire and the New Liberalism* (Cambridge, 1971), Peter Clarke, 'Electoral Sociology of Modern Britain' *History*, 57 1972, (拙訳「近代イギリスの選挙社会学」(一)(二)、『大阪外国語大学論集』、第8号、第10号、1992年、1993年所収)、Peter Clarke, 'The electoral position of the Liberal and Labour parties 1910-14', *English Historical Review*, 1975, Peter Clarke, 'The progressive movement in England', *Transactions of the Royal Historical Society*, vol.24, 1974, Neal Blewett, *The Peers, the Parties and the People; the General Election of 1910* (London, 1972), A.K.Russell, *Liberal Landslide: The General Election of 1906* (London 1973), H.C.G.Matthew, Ross McKibbin, J.R.Kay, 'The Franchise Factor in the Rise of the Labour Party' *English Historical Review*, 1976, reprinted in R.McKibbin, *The Ideologies of Class: Social Relations in Britain 1880-1950* (Oxford, 1991), Peter Clarke, 'Liberals, Labour and the Franchise' *English Historical Review*, 92(1977), Alun Howkins 'Edwardian Liberalism and Industrial Unrest; a class view of the decline of Liberalism', *Hisotry Workshop*, (1977 autumn), Kenneth D. Wald, *Crosses on the Ballot* (Princeton, 1983), Dancan Tanner, 'The parliamentary electoral system, the "fourth" reform act and the rise of Labour in England and Wales',

Bulletin of the Institute of Historical Research, 56, 1983, Keith Laybourn and Jack Reynolds, *Liberalism and the Rise of Labour 1890-1918* (1984), George L. Bernstein, *Liberalism and Liberal Politics in Edwardian England* (London, 1986), Duncan Tanner, *Political Change and the Labour Party 1900-1918* (Cambridge, 1990).

- (5) レインボー・サークルの創立された1893年の記録は残っていないが、1894年以後の会合の記録はフリーデンの編集によって公開されている。M. Freeden ed., *Minutes of the Rainbow Circle, 1894-1924* (London, 1990)。もとより、参加者の自由主義は、決して一枚岩ではなかった。
- (6) フリーデンが、新自由主義を取り上げた超学問的な動機は、19世紀的自由主義を前提にした自由主義への批判に、政治理論の立場から答えることにあった。「自由主義の基本的な教義は、第一次大戦前の世代で、重大な、そして決定的なやり方で定義され直した。・・・現代の福祉国家という観点から見れば、世紀転換期の新自由主義こそ、保守主義や社会主義というライバルを引き離していたのである。」Michael Freeden, *The New Liberalism: An Ideology of Social Reform* (Oxford, 1978.) p.1. なお 'Eugenics and Progressive thought: A Study in Ideology Affinity', *Historical Journal*, 22. (1979), Michael Freeden, *Liberalism Divided: A Study in British Political Thought 1914-1939* (Oxford, 1986), Michael Freeden, *J.A. Hobson: A Reader* (London, 1988), Michael Freeden (ed.), *Reappraising J.A. Hobson: Humanism & Welfare* (London, 1990) のフリーデンの論稿も参照。ただし、以下の叙述は、あくまで行論に必要な限りでフリーデンの豊富な研究を要約しているに過ぎない。
- (7) 「グリーンが存在しなくても、自由主義はなお、コレクティビストとなり、革新的な社会改革を指向するようになったであろう。」「生物学的、進化論的な理論は、・・・より洗練され、時代の問題により直接的に関与し、そしてほぼ確実により広く影響を及ぼした、自由主義の哲学の独自の源であった。」Michael Freeden, *The New Liberalism*, op. cit., pp.17-18, 56-60. ホブハウスは、グリーンを賞賛していたものの、グリーンとは違って、社会を単なる抽象的形而上学的な精神的原則存在としてではなく、経験的なものとして把握し、国家干渉が倫理的目的を達成する手段であることを明確に認めていた、とフリーデンは指摘している。*ibid.*, pp.67-68. むしろ自由帝国主義の若手の代表格と目されていたアスキス (Asquith) は、オックスフォードのベイリオル・カレッジでグリーンへの指導を受けていた。また自由帝国主義派の指導者の一人のホールデン (Haldane) はドイツ哲学、特にヘーゲルに惹かれていたのである。
- (8) *Ibid.*, pp.85-88.
- (9) *Ibid.*, pp.105-107, 110,
- (10) *Ibid.*, pp.27-28. 当時の人口に膾炙した用語法では、社会主義という言葉は、「コレクティヴィズム」というもう一つの曖昧な言葉と同じく、社会問題への関心を漠然と意味していた。また哲学的には、広く、アトム的な個人に対して人間が社会的存在であるということへの認識を指していた。フリーデンによれば、自由主義に浸透した社会主義とは、こうした意味での社会主義に他ならない。マルクス主義的社会主義が強い影響力を及ぼすようになると、社会主義という概念は、そうした漠然とした社会認識ではなく、体系的な社会変革のイデオロギーとして理解されるようになる。そうした後代の用語法からみると、こうした漠然たる社会主義の概念は、「コレクティヴィズム」とよぶほうが相応しい。しかし20世紀初頭のイギリスでは、歴史的には、両者には画然とした区別はなかった。そのこと自体に、今日的な観点から見ても、重要な意味が含まれているであろう。本稿では、当時の歴史状況を映し出すために、あえて曖昧な歴史的用法に従っている。
- (11) *Ibid.*, pp.46-47.
- (12) *Ibid.*, pp.71-74.
- (13) *Ibid.*, pp.130-131.
- (14) Peter Clarke, *Liberals & Social Democrats* (Cambridge, 1978)。なお Peter Clarke, 'introduction' in Peter Clarke ed., *J.A. Hobson, Crisis of Liberalism*, (London, 1974) も参照。ただし、フリーデンの場合と同じく、以下の叙述は、クラークの研究の豊富な内容を第一次大戦前の新自由主義の歴史的性

格を考えるに必要な限りで要約したに過ぎない。

- (15) Quentin Skinner, 'Meaning and understanding in the history of ideas', *History and Theory*, VIII(1969).
- (16) Peter Clarke, *Liberals & Social Democrats*, *op.cit.*, pp.7-8.
- (17) *Ibid.*, pp.15-16.
- (18) *Ibid.*, pp.11, 13-14, 74.
- (19) *Ibid. op.cit.*, pp.66.
- (20) A.M.Mcbrar, *Fabianism and English Politics 1884-1918* (Cambridge, 1962). なお拙稿「国家的効率と自由主義への反逆」大阪外国語大学『英米研究』第16号、1989年参照。
- (21) Peter Clarke, *Liberals & Social Democrats*, *op.cit.*, p.44-46.
- (22) *Ibid.*, pp.71-72, 93-95.
- (23) *Ibid.*, pp.68-70, 94.
- (24) *Ibid.*, pp.100-101.
- (25) *Ibid.*, pp.98-99.
- (26) *Ibid.*, pp.116-118.
- (27) Bernard Semmel, *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought 1895-1914* (London, 1960). 邦訳、『社会帝国主義史』、みすず書房。なお拙稿「自由帝国主義と新自由主義」(一) 前掲、および「国家的効率と自由主義への反逆」前掲を参照。フリーデンのセンメルに対する批判は、M.Freeden, *The New Liberalism*, *op.cit.*, p.80 n.11. を参照。
- (28) M.Freeden, *The New Liberalism*, *op.cit.*, p.11,p.80.
- (29) *Ibid.*, p.22.
- (30) *Ibid.*, pp.5-6. 「もしも自由主義の伝統に断絶があるのか、あるいは自由主義の継承がみられるのか、が問われるならば、答えは明かに継続性に傾くに違いない。」p.22,29.
- (31) *Ibid.*, pp.22-23,p.30.
- (32) *Ibid.*, p.71. 公共サービスの拡大、私企業の規制、不労価値増加の課税等。しかしこれはウェップにとっても、自由主義の拡張に他ならなかった。
- (33) *Ibid.*, p.85-92.
- (34) *Ibid.*, p.72.
- (35) *Ibid.*, p.51,255. そればかりか、フリーデンの表現を用いれば、新自由主義の構想は、いかなる社会主義者の政府(労働党政権)が達成したものよりも、ずっと包括的な福祉政策であった。
- (36) もっともフリーデンは、マクドナルドと新自由主義の間には、フェビアンとの場合よりも、もっと明確なイデオロギー的な親縁性があったことを認めている。*ibid.*, p.149,255 n.
- (37) Peter. Clarke, *The Keynesian revolution in the Making 1924-1936*. (Oxford, 1988)p.14.
- (38) Peter. Clarke, *Lancashire and the New Liberalism* (Cambridge, 1971). この著作をきっかけとした論争の文献については先の注(4)を参照。
- (39) Peter. Clarke, 'The progressive movement in England', *Transactions of the Royal Historical Society*, vol.24, 1974.
- (40) Peter Clarke, 'The social democratic theory of the class struggle' in J.Winter ed., *The Working Class in Modern British History: Essays in honour of Henry Pelling* (Cambridge, 1983).ただし「社会民主主義」という言葉自体は、19世紀末のイギリスにおいては、ハインドマン(Hyndman)の教条的なマルクス主義に従う人々、すなわち社会民主連盟(Social Democratic Federation)のことを指しており、今日的な意味とは大きく食い違っていた。
- (41) Peter Clarke, 'Electoral Sociology of Modern Britain' *History*, 57 1972. 拙訳「近代イギリスの選挙社会学」(一)(二)、『大阪外国語大学論集』第8号、第10号、1992、1993年参照。
- (42) Peter Clarke, *The Keynesian Revolution in the Making 1924-1936*, *op.cit.* クラークは、自分の定義は、

新自由主義を広い政治的傾向として捉えるのに対して、フリーデンの解釈は新自由主義を「全体論的、有機体論的、理想主義的哲学」とみなす「より厳格な、シェーマティックな解釈」とであると指摘している。Peter.Clarke, *ibid*, p.13. ここでは、クラークはレッセ・フェールの放棄、国家社会主義と階級闘争の拒否、市場経済の修正、自由主義と穏健な労働者（ないし労働党）との同盟という四つの点から新自由主義を改めて定義し、ケインズを、この新自由主義の延長線上に位置づけている。

- (43) H.C.G.Matthew, *et al.*, 'The Franchise Factor in the Rise of the Labour Party' *op.cit.*
- (44) McKibbin, *Ideology and Class*, *op.cit.*, p.67
- (45) Peter Clarke, 'Liberals, Labour and the Franchise' *English Historical Review*, 92 (1977).
- (46) Harold Perkin, 'Individualism and Collectivism in Nineteenth Century Britain: A False Antithesis' *The Journal of British Studies* vol. 17.(1977)
- (47) Matthew Fforde, *Conservatism and Collectivism 1886-1914* (Edinburgh, 1990) p.162.
- (48) 拙稿「国家的効率と自由主義への反逆」(大阪外国語大学『英米研究』第16号、1989年)、Macbirar, *op.cit.*, Norman and Jeanne Mackenzie, *First Fabians* 1979, (London)参照。
- (49) Peter Clarke, 'Progressive movement in England' *op.cit.*, p.166.
- (50) *Fabianism and Empire* (London, 1900)を見よ。ウエップ自身は逡巡し、公然とボーア戦争に賛成したわけではないが、その後自由帝国主義派によりそってゆくことになる。Beatrice Webb, *Our Partnership* (London, 1948)および Mackenzie, *First Fabians*, *op.cit.* を参照。しかしフェビアンと新自由主義を一つの政治潮流にくることが問題であるとしても、それは新自由主義と労働者の同盟を否定することではない。そもそもフェビアンは本来労働運動の一部ではなかった。マシューらのように、旧自由主義の枠組みの中で新自由主義を捉えつつ、労働者の階級的コミュニティの結束を、自由主義とは異質なものと見るとすれば、逆に、なぜ労働者階級の指導者一例えばマクドナルドのような人物が、新自由主義に接近したのか、その意味が問われねばならないであろう。

(1993. 9. 14 受理)